

氏名（本籍）	シフ 澁	ヤ 谷	マサ 政	コ 子（東京都）
学位の種類	博士（音楽学）			
学位記番号	博音第48号			
学位授与年月日	平成14年3月25日			
学位論文等題目	論文 前衛音楽の美的成立根拠 - 美的意味のメタファー性について -			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	船山 隆
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	野田 暉行
（ 〃 ）	〃	〃	（ 〃 ）	中井 義幸
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	土田 英三郎
（ 〃 ）	〃	教授	（美術学部）	松尾 大

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、次の二点である。第一に、音楽を聴くことから現出する美的意味の性質とその創出のメカニズムを明らかにすること。第二に、この美的意味に関する考察の成果にもとづき、前衛音楽の美的意味の特性について考察し、その成立根拠を明らかにすることである。

この二つの課題は、共に、従来の音楽学において、盲点となっていた側面に光を当てる試みである。まず音楽の意味論の分野においては、18世紀以来の創造中心・構造中心の視点により、聴き手による可動的かつ多元的な意味の構成という側面は常に見落とされてきた。本論文では、音楽を聴く論理を、すなわち美的意味構成の論理を、創作の論理への従属関係から解放し、その独自の領域、すなわち、志向性・可動性・多元性・他者性をそなえる空間へ差し戻す。そのうえで、現象学における志向性の概念と、認知言語学において提唱されているメタファー的概念システムという認知モデルを用いて、美的体験の基本的性格とその機構について、理論的考察をおこない、そのモデルを提出した。

前衛音楽に関しては、これまで、多くの研究がなされており、その作曲技法や作曲理念の特質、文化的背景など、創作面に関しては、重要な成果が次々と提出されている。しかしながら、この音楽を聴くことから得られる美的満足の根拠については、ほとんど論じられていない。また、美的意味として論じられているものも、聴取の論理ではなく、創作的・哲学的・社会学的論理からの規範的研究となっている。本論文では、筆者が提出した美的体験のメタファー・モデルにそって、前衛音楽の聴取へ記述的にアプローチし、その特性を明らかにした。そこから得られた結論は、前衛音楽の美的意味が、18世紀以来の音楽文化によって大きく支えられていると同時に、その伝統的概念の構造に脱人間化という変容が見られる、ということである。

論文の構成は以下のとおりである。

序においては、聴き手にとっての意味と創作的な意味とを区別する意義、および、前衛音楽の

美的意味を論ずる意義を提示した。第1章と第2章は、理論的考察にあたる。第1章においては、美的意味の独自性を保証する基本的概念として、現象学の志向性について論じながら、美的体験の基本的性格を明らかにし、同時に志向性にもとづく受容美学の問題点を指摘した。第2章は、この問題点を克服するために、認知言語学において、提唱されている、メタファー的理解、概念システム、メンタル・スペースの融合などから成る認知モデルを導入し、これを音楽の聴取に適用することの妥当性を論じた。第3章からは、前衛音楽の美的意味の問題へ向かうが、まず、前衛音楽と、ロマン主義的諸概念との深い関連性を論じる。前衛音楽に関する言説の観察に基づき、その美的意味の現出のモデルとして、「創造者のメタファー」と「生命体のメタファー」という二つの概念システムを提出する。第4章は、このモデルを用いつつ、前衛音楽の特異性のありかについて考察を展開する。そして、結論として、前衛音楽の美的体験は、伝統的な概念システムの脱人間化により特徴づけられることを論じた。